

思い出の一冊

二人の天魔王ー「信長」の真実



(電気電子工学科)
油谷英明



思い出の一冊として「二人の天魔王ー「信長」の真実」著者明石散人、小机種彦（講談社）を挙げたいと思います。タイトルにあるように天魔王・織田信長を題材として扱っていますが、著者の一人である明石散人氏は京極夏彦の人気小説“京極堂シリーズ(?)”で明石の先生としても登場している謎の多い人物です。博識と緻密な論理で有名な京極夏彦が先生と仰ぐほどの人物ですから、この本に収められている情報は膨大であり、繰り広げられる論理は極めて強烈です。今のイメージとは大きく異なる信長像が描かれているため、この本は信長

ファンの方にはお勧めできません。

この本は、江戸時代には全く人気がなく草双紙にもならなかった信長が、今日の映像や各種メディアの中での信長になった経緯を追うところから、始まっています。そして、信長を語る上で必要な信憑性の高い文献が存在していないことから、最初のもまとまった文献である「信長公記」の著者である太田牛一の隠された意図等が、しだいに暴かれていきます。各文献からの引用をはじめ、合戦に関しては帝国陸軍参謀本部作成「桶狭間戦図」を使うなど実に資料豊富で、強力な説得力を有していることは疑う余地がありません。様々な角度から織田信長の実像に迫り、タイトルにあるもう一人の天魔王・足利6代将軍義教との関わりや信長の帝位簪尊への野望が明らかにされていきますが、説明するよりも読んでもらった方が良いでしょう。本の宣伝文句にあるように明石散人の超絶！歴史推理が楽しめるはずですから。この本を思い出の一冊にした一番の理由は、自分が長い間抱き続けた信長に関するいくつかの疑問を解消してくれたからです。例を挙げると、信長と言えは「うつけ」の振りをしていた事と長篠合戦の鉄砲三段構えが有名ですが、どうしてもこの話に自分自身納得することができませんでした。そもそも名君（将）になりえたのなら、「うつけ」の振りなどせず、家臣の信頼を得て国力を増すのが、廢嫡の危機を招くよりはるかに賢明であり、長篠合戦における武田方戦死者一万数千名の話は、それだけの人馬が横たわった光景が現実的ではないからです。これらの疑問に解答を与え、歴史という題材の中で真実を抽出する技術の凄さを垣間見せた一冊であります。「真実を抽出する」ということは信長の話に止まらず、量としての情報は溢れていても真実を見つけるのが難しい現代社会を考える上で参考になる一冊だと思います。

こころ



(物質化学工学科)
山根大和



僕の思い出の本として、夏目漱石の代表的作品である「こころ」を挙げる。漱石は、周知のとおり国民的作家で明治時代の文豪であり千円札の人としてその名前は広く世間に知られている。多くの高専生が漱石の作品を読んでいるかもしれない。「こころ」の内容は、恋愛、友人関係、嫉妬、などがテーマであったと思う。僕は高校生の時に初めて読んだのだが、当時思い詰める大人の世界を知ってしまったように感じて、なぜか涙を流した記憶がある。漱石の多くの作品は、小学生や中学生では読みこなせないと思う。その内容の本質は、20歳前後の年頃になってようやく

理解できるのではないだろうか。また、歳を重ねた今になって、漱石のいくつかの作品を読み返してみると、さらに、いろいろ考えさせられる。漱石の作品以外にも、今の時代には古典と思われる森鷗外、芥川龍之介、太宰治の全作品は、いつの時代にも通じる普遍的テーマが多い。さらに、高校生の時に読んで感動した作品には、石川達三の「青春の蹉跎」、井上靖の「氷壁」を挙げる。大学生の時には、外国の小説で「老人と海」などの短編を乱読した思い出がある。あれこれ考える20歳前後では、漫画もいけど、時にはじっくりと時間をかけて考えながら小説を読みふけることは大切だと思う。ただし、高専生は本業の理科系の勉強は忘れないでほしい。

読書の勧め以外には、就職を考えている人には、ぜひ新聞を毎日読んでもらいたい。新聞から得られる政治、経済、教育などの問題や芸術、スポーツに関して自分の意見を持ち、人に伝える努力をし、その習慣を身に付けて下さい。自分独自の考えは個性に繋がり、それが創造力を生み出す源になる。昨今世界で起きている悲しい出来事に対して、特定の国の政府の意見や行動に、自分の意見なしに賛同するのではなく、僕達は自分の意見を持ち、人に伝え、より良い解決法を探るべきではないかと思う。また、今の時代は情報が氾濫しているのだから、いろんな他人の意見を十分に参考にできると思う。しかし、最近僕が個人的に感じることは、意外に本校の高専生は、ある特定の影響を受けやすく、思いこみによる偏った意見を持つ人が案外多いということだ。日本人はもともとある1つの方向を向きやすい。影響を受けやすい20歳前後の時代に多様な考え方を持つ習慣を身に付けて下さい。常に相対する意見を並べて、自分で公正に判断できるような人であってほしい。「よく考えて行動する」「思慮深い人間になる」ためには、読書が大切だと言うことである。